



なるほどアイヌ文化トーク
ソノコ de ソノコ

アイヌ文化にどっぷり浸って生きてきた
本田優子(札幌大学副学長)と
村木美幸(アイヌ民族博物館専務理事)が、
その魅力をソノコ(=お便り)形式で語り合います。



今月のテーマ **コタン(村)**



イラスト/安田千夏

人が暮らす場所をアイヌ語でコタン(村)といいます。家が二戸あってもコタンと呼び、その規模は自然環境に大きく左右されたといえます。コタンを取り巻く自然の力が豊かであればあるほど、たくさんの人々の生活を支え養うことができずからぬ。かつてのコタンが河川や河口の近くに多くつくられたのも、アイヌの食の中心であったサケがたくさん遡上するからなんだって。私の住む白老もサケが上る川ごとに「コタンがあった」といいます。山や川、海といった自然の空間をイウオロと呼び、「コタンごと」にその境界が決められていたといえます。イウオロは「コタン」に属する排他的な生業領域で、他から侵されるようなことがあれば、戦争にまで発展したケースもあつたんだよね。

今という行政や司法などのルールも「コタンごと」に決められていたんだって。犯罪や違反行為などがあれば、まずはウバシクマ(言い伝え)つまり昔からの慣例などに従って判断し、判断が分かれればチャランケという双方が言い分を主張する裁判のような形がとられ、それでも判断がつかない場合にはトウス(巫術)を通じて神意を伺うこともあつたんだって。

優子さん、イウオロひとつとってもそうですが、かつてのアイヌコタンはそれぞれが独立したコミュニティだったんですね。



コタンには、コタンコロクル(コタンII村コロクルを司るクルII人)と呼ばれる村おさがいまして。村おさは世襲ではなく、その時のその村で最もふさわしい人が選ばれたんですね。じゃ、ふさわしい人ってどんな人? 実は、村おさの3つの条件というのが知られているの。①パウエトク(雄弁)、②ラメトク(勇氣)、③シレットク(美貌)。村おさは、なにかあつた場合には村を代表して弁舌を振るわないといけないので、雄弁さは必須条件。もちろん、大事件を前にして怖じ気づくようじゃ村おさ失格なので、勇氣も絶対必要。でも、どうして美貌、つまりカッコよくないとダメなの? で、昔、恩師である萱野茂先生に聞きました。「雄弁で勇氣もあるけど、いまいちカッコよくない人って村おさになれなかったんですか?」萱野先生の答えは「なれない!」。いうやつは参謀に回るのさ」。どうしてそこまで美貌が大事? 答えは来月号をお楽しみに(連載開始後、初のパターンかも…笑)。

ちなみに、淑女の3条件というのもあります。美貌(やつぱりね)、勇氣(女性も勇氣がないとダメ)、最後は雄弁の代わりにテケトク(手先が器用)。アイヌ社会では縫い物や刺繍が上手じゃないと女性失格だったの。うーん、ハードル高いね。

